

課題

すすき

「晩生（おくて）」

人物

後藤 いさお (32) 陸上競技の元選手

河合 里子 (31) 離婚した後藤の妻

○田舎道のバス停

少し日が暮れかかった空。

車がほとんど通らなそうな田舎道。

道端には枯れかけた草花やススキ

が揺れている。

バス停とベンチがあり、バス停に

は朝顔のツルが巻きつき、萎んだ

朝顔が風に揺れている。

そのバス停の前には、後藤いさお（

32）が立っている。

河合里子（31）が駆け込んでくる。

里子「（息をきらせて）間に合った？」

後藤「だめだった！」

里子「うそ？！」

後藤「うそじゃないよ。なんでこんな時

に嘘なんか」

里子、後藤の話も聞かずに、バス停

の時刻表をみて

里子「次のバス、一時間後じゃない！」

後藤「：」

里子「どうして?!」

後藤「どうしてって、ちやうど走っていくバスみえて：」

里子「みえて?」

後藤「走ったけど、無理だった」

里子「何それ：」

後藤「走っても勝てなくて、バスには」

里子「：そういう事、聞いてない」

後藤「：」

里子「まだ、5分しか経ってないのに」

後藤「バスだったたまには、時間通りく

る時もあったて：」

里子「：（後藤を睨む）」

後藤「だって、それが本来のバスだし」

里子、バス停の横のベンチに座る。

里子「なんなのよ、もう」

後藤「：ごめん」

里子「本来のバスって：」

後藤「：」

里子「なんのために走ったんだか：」

後藤 「久しぶりだったろ？」

里子 「私はあなたみたいに運動バカじゃないの」

後藤 「俺だって最近はずっと走ってないよ」

里子 「そうなの？」

後藤 「最近忙しくってさ」

里子 「……」

後藤 「だから気持ちよかったな、走れて」

里子 「……だめでしょ、それ」

後藤 「え？」

里子 「いさおから走るの失くしたら、何

残るのよ」

後藤 「なんだよ、その言い方」

里子 「私より陸上だったくせに」

後藤 「別にそういうわけじゃ」

里子 「だってそうだったでしょ」

後藤 「別に走るのやめたって、俺は俺だ

よ」

里子 「……ゆかりさんのため？」

後藤 「ちがうよ」

里子「：」

里子「じゃあ今日、ゆかりさんになんて
言ってきたの？」

後藤「：」

里子「何も言わないか、普通」

後藤「：反省したんだよ」

里子「え？」

後藤「お前のことで反省して、それで変
わったんだよ」

里子「そんなこと：」

後藤「（食い気味に）だから、お前より
ゆかりが大事だからとかそういう理由
じゃなくて」

里子「いいよ。そんなに強調しなくて」

後藤「お前、そういうの気にする奴だろ」

里子「：」

後藤「そういうのもわかるようになった
んだよ」

里子「：」

少し風がふく。

里子、寒そうな仕草をする。

後藤、上着を脱ごうとしたので

里子「いい。そういうの」

後藤「：だって」

里子「いさおだって寒いでしょ？」

後藤「そりゃ、まあ：」

里子「私、カイロもってきたんだ。寒い
かもって思ってた」

里子、カバンの中から使い捨てカイロを1つ出す。

里子「1個しかないけど」

後藤「あ：」

里子「いさお、暑がりだったからいらな
いかなって：」

後藤「いや、今でも暑がりだよ。うん」

里子「：」

後藤「使ってくれよ、だってそれ里子の
だし」

里子「：そうする」

里子、カイロで手を温める。

後藤、きよろきよろと周りをみて

後藤「（独り言のように）自動販売機とかそういうのがあればいいのにな」

里子「……」

後藤「ほら、温かいモノとか飲めば、少しは温かくなるかなって」

里子「あ！」

後藤「え？」

里子「あそこ」

後藤「どこかにあったっけ？」

里子「ほら！」

里子、指さす方向には、スキの野原が広がっている。

後藤「え？どこにあるんだよ？」

里子「違う。あそこ、スキの影に何かいる」

後藤「は？」

里子「狸？」

後藤「いるんかよ、狸なんて」

里子「ちよつと白っぽい：」

後藤 「白い狸なんて」

里子 「じゃあ、猫？」

後藤 「まあ野良猫とかなら」

里子 「こっち来ないかな」

後藤 「だから、どこに？」

里子 「ほら、あそこ」

後藤 「あ、ホントだ、白っぽいからやっ

ぱり猫とか：」

それは白いゴミ袋であった。

風にゆれて飛んでいく、ゴミ袋をみる二人。

里子 「：いっちゃった」

後藤 「ゴミ袋だろ」

里子 「：そうだね」

後藤 「そうだよ。なんで、名残惜しいみ

たいな顔してるんだよ」

里子 「生きてるみたいだったし」

後藤 「：」

里子 「そう思わない？」

後藤 「そうだな：」

里子、ゴミ袋が飛んで行った方向
をみて

里子「私さ、猫、飼いたかったんだよね、
あの頃」

後藤「：そんなこと一回も」

里子「だって、私も仕事してたし、いさ
おは選手として頑張ってた時だったか
ら」

後藤「：」

里子「猫がいれば何とかなつたかな、私
たち」

後藤「違うだろ、それ。後だろ、猫を飼
いたくなつたのって」

里子「：」

後藤「子供いれば、なんとかなつてたろ、
俺ら」

里子「子供いなくても、仲良くしている
夫婦はいるよ」

後藤「：」

里子「：そういう事だよ」

後藤 「ごめん：」

里子 「あの時、猫飼おうって行ってたら、
変わってたかな」

後藤 「：」

里子 「変わってないか：」

後藤 「：変わってたよ、きっと」

里子、少し笑う。

後藤 「（その笑いに）なんだよ？」

里子 「流産しなければよかったって、言

うべきだったなって：」

後藤 「：また一緒に、墓参りしよう」

里子 「いいよ。もう」

後藤 「：なんで」

里子 「私、今度結婚するの」

後藤 「：」

里子 「すごくいい人でね、今日もちゃん
といさおと墓参りする事言ったら、行

ってこいって」

後藤 「：そっか」

里子 「いい人でしょ？」

後藤「：そうだな」

里子「いさおは、ゆかりさんに言えてないんでしょ？」

後藤「：」

里子「そーゆーの変わんないね」

後藤「：」

里子「だからさ、私たちこれで良かったんだよ」

後藤「：」

少しづつ暮れていく空に、月が浮かびあがってくる。

後藤、月をみて

後藤「月、きれいだな：」

里子「：遅いよ、もう」

その言葉に後藤ははっと里子をみる。

里子はバスが来る道を見ている。

里子「：遅いなあ、バス」

風に、ススキと朝顔が揺れている。

了